

1 タイトル

「クヌギ林とため池がつなぐ 国東半島・宇佐の農林水産循環」

～森の恵み しいたけの故郷～

2 コンセプト

クヌギ林とため池群によって持続的に維持されている
日本一の原木しいたけ生産をはじめとする農林水産業システム

3 概 要

(1) 日本一のクヌギ林とため池群

- ①雨水が浸透しやすい火山性の土壌と晴天日の多い瀬戸内海式気候による「足りない水」との闘いの歴史
- ②乾燥した土壌はスギよりも広葉樹に適し、クヌギの蓄積量日本一、全国の22%が大分県
- ③量・質ともに日本一の乾しいたけ生産へ原木を供給
- ④伐採・萌芽後2～3本程度に芽仕立管理を行い、15年程度で再生、再利用のサイクルが確立
- ⑤雨水が浸透しやすい火山性の土壌は、水田農業にとって障害となるが、クヌギ林の落ち葉や使用済み原木は、腐食し膨軟な保水マットを形成しつつ肥沃な土となり、ミネラルと栄養分豊富な水をかん養
- ⑥急短な地形的制約から、谷筋ごとに小規模な複数のため池を連携させた用水供給システム
- ⑦具体的には、まず下流域のため池を利用し、水が無くなったら、中流域、最後に上流域を利用するシステム
- ⑧クヌギ林とため池を適正に管理することが、食料生産・生物多様性に大きく貢献

(2) 日本一の原木乾しいたけ

- ①健康志向を背景とした世界的な日本食の普及に伴い、和食の料理や出汁に欠かせないしいたけはグローバルな食材
- ②しいたけの人工栽培は、約340年前に大分県で鉦目式栽培法によって発祥。現在、全国の生産量の41%を大分県で生産
- ③栽培方法は、伐採したクヌギにしいたけの種菌を植付け、2年間でクヌギに菌糸を充満させ、発生のためのほだ場へ移動
- ④冬季低温・乾燥の気象条件と広葉樹林内の「明るいほだ場」を活用し、高品質な乾しいたけを生産

- ⑤全国乾椎茸品評会でたびたび最高賞を受賞
- ⑥しいたけ研究グループの活発な活動等による技術研鑽と新規参入者の確保
- ⑦原木しいたけ栽培は、森林資源から食料が産み出されるということで、世界的な食料安全保障に貢献

(3) 多様な農林水産業と生物多様性

- ①米と原木乾しいたけ、黒毛和牛との複合経営の他、白ねぎ、小ねぎやハウスみかん等の多彩な経営モデルが存在
- ②水の利用時期、労働のピークが重複しない水稻作とシチトウイを組み合わせた日本で唯一の農法が現在も継続
- ③シチトウイは断面が3角形のため織機の機械化が進まず、イ草に置き替わっていったが、高品質な畳の需要に対応し、シチトウイの生産振興を図るため、「くにさきシチトウイ振興会」を設立
- ④伝統品種の「みとり豆」(ささげの一種)、大分県特産のカボス等地域固有の産物が存在
- ⑤クヌギ林の形成する保水マットは、河川や海への土砂の流入を防ぎ、広大な干潟やリアス式海岸等変化に富んだ好漁場へ豊かな水を供給
- ⑥生物多様性では、丘陵地の岩上に生育するイワギリソウ、海岸近くの農耕地に飛来するコシヤクシギ、オオイタサンショウウオやカブトガニ等環境省レッドリスト掲載の希少生物が生息

(4) 地域農業に深く関わる歴史と文化

- ①宇佐神宮と密教が融合した神仏習合の六郷満山文化は、荘園制と呼ばれるムラ支配システムの拡大と合わせ水田開発を推進
- ②中世荘園の姿が今も生きている田染の荘、水源となる湧水には「雨引神社」を建立
2010年に国の重要文化的景観の指定
- ③修正鬼会やどぶろく祭り等1200年以上続く農耕にまつわる民俗行事